

## 北魏漆画棺 (一)

P.E.カレッキー 著  
A.C.ソーパー 著  
谷 川 博 美 訳

### 〔訳者まえがき〕

小稿は、『ARTIBUS ASIAE (VOL. LI, 1/2/MCMXCI)』(1991)に掲載された「A NORTHERN WEI PAINTED COFFIN」の筆頭著者・米国バード大学(ニューヨーク)のP. E. カレッキー博士との私信によって好意的な翻訳許可を得ることができてこの私の拙い翻訳の運びに至った。この事は翻訳者としてこの上ない喜びである。

漢人以外の異民族による北魏政権の成立は、文化面でも多彩な面貌を我々に表出してくれる。北魏文化の特色については種々論じられているが、我々の研究対象「孝子伝」に及ぼす「北魏漆画棺」の「孝子伝図」の特徴に関するカレッキー博士らの論考は、木棺の断片の頂上部分に遺された、舜など孝子説話のシーンから孝子伝や孝子伝図の各種翻案の例証や多彩な影響の分析、加えてアメリカ合衆国各地の美術館収蔵の孝子伝図の評価、鑑定などにも及んでいる。鮮卑族拓跋部と漢民族の葬儀様式の混成化、漆棺、漆棺画、銘文、副葬品や歴史上の記述などから墓主を推定した根拠の説明、葬具や副葬品への儒教、神仙・道家思想や道教に佛教の三教の影響や、西域からの文化・文物の移入などへと論及は多種多様である。この論考は名著で、長文である。訳稿の後半は、次号への投稿を予定している。

古い時代の孝子の孝行の場面を描いた一連の図像や天の河にまつわる説話のごく早期の象徴的な図柄にすばらしい彩色と漆を施した北魏の木棺が、北西部の墓穴から発見されたという報告を特集記事とした考古学月刊誌『文物』が、1984年に発刊された<sup>(1)</sup>。そのレンガ作りの墓は1971年の夏、固原郊外で鉄道探査隊によって発見されていたが、一旦埋め戻され、1981年になって改めて慎重な調査が行なわれた。この墓は盗掘されておらず、浸水の被害を受けていたがそれを除けば比較的良好に保たれていた。男女一人づつを納めた二つの木棺に、65個の金属製、金製、銀製、銅製、そして鉄製の葬具、ほかに4個の粘土製容器が加えられていたが、埋葬された状態のままに保たれていた。特徴的な副葬品としては五世紀末のペルシャ・ササン朝のコインがあった。

この墓の存在場所は寧夏県の自治州であり、北部甘肅省と北部陝西省の境界に接し、古代の固原の東に近く、前唐の要塞都市であり、520年代の高平に至るまで行政の中枢でもあった。

A.C.ソーパーは、墓主が「李順」という中国系の貴族であると主張して来た<sup>(2)</sup>。李順は、北魏の太武帝から手厚い待遇を受けていたが、晩年になって名誉を剥奪され、西暦442年にはその知行地の西方で処刑された。次の皇帝のもとで、李順の息子たちが急速に名誉回復した467年に至って、李順は元の地位にふさわしい華やかさで再埋葬されたことは間違いない。しかし、息子たちも又、その3年後に名誉を剥奪されてしまう。息子のうち、兄の方は租税スキャンダルに関与したとされ、弟の方は漢人の皇太后・馮氏との不倫関係のために名誉を剥奪された。その息子らも処刑される運命にあり、その時がまさに彼らの父を再埋葬する、時系列的に最終下限でもあった<sup>(3)</sup>。李順は死亡前に、高平の大公という称号を与えられていた。その彼が極く短期間ではあったが、一旦名誉を回復した時、北魏王朝初期としては皇族以外に数少ない「王」族の一人になり、皇子にまでなっていた。確かな証拠はないが、その頃彼の妻は献身的で孝養を尽くす王族の配偶者を意味する孝妃という称号を授けられていた。しかし、二度目の名誉剥奪によって、この夫婦は庶民へと貶められたのである。これらの個人史には通常では有り得ない記述が加わっている：それは一族の間で礼節を重んじて孝養を尽くし合ったという徳義が世間から称賛を受けていたために、この二人の息子たちの死も又、広く哀悼された、というのである。

固原の墓は平面図上は正方形である。一辺が3.8mで、コーベルで支えられた形のドームの頂点までは3.9mの高さである。西方向に、長さ16m、深さ9.7mを頂点とした直角三角形の底辺を長く急峻な傾斜路とし、底部の墓室には甬道が取り付けられている。

考古学的報告書の執筆者たちは、この墓が北魏の、拓跋部が所属した遊牧民の鮮卑族の葬儀形式として大切な証拠になる発見である、という。事実、最重要の証拠物件には、墓室への墓道の傾斜路や、木棺のデザインや、青銅製の棺のスタイルなどがあり、これらは中国式埋葬方法と混成されたものである。これは又、鮮卑族の伝統的な葬儀習慣としては、より初期の稀な一例として報告書に記載され、しかも最高度に発達した形の墓葬形式であるとされている。これ以外に南東の遼寧省の二人用の五世紀初頭の墓が完全な形で発見されたが、これは李順よりも一世代前に死去したもう一人の、拓跋部に厚遇された北部中国人のものとされた。その男の死者、墓主—馮素弗—は馮跋の弟であったが、その馮跋は409年に北東の辺境の地に、短命ではあったが、北燕王朝の創始者となる幸運に恵まれた武人であった<sup>(4)</sup>。素弗の場合、棺の中に中国様式の四枚の、官職を示した金属製のシールの記述と（その内の一枚は固い黄金製であったが）、晋王朝の馮素弗の短い略歴を掲示した四枚続きのタイルの内容と、ピッタリ一致したことから、素弗と確認された。中国と関連づけられる諸々の墓葬具の中には、受け皿大のガラス製の皿、硯石、青銅製の容器や、固原墓の断片のように装飾の施された銘板・飾り板などもあった。そして彩色された妻の棺（勿論石の）には中国風の建物を背景にした侍女たちがいっぱい描かれていた。その妻は、外交的な配慮が働いた当然の結果としてだけでなく、棺の中に二匹の大小の犬の骸骨も納められていたことから、中国系の夫とは対照的に鮮卑族の族長の娘と

考えられている。

〔墓室の収蔵品〕

固原の墓から発見され最も中国的でない収蔵品は、ササン朝ペルシアのペーローズ王（在位 459～84年）の三日月と二枚の側翼を描いた王冠のデザインを採用した一枚の銀貨である<sup>(5)</sup>。無数のササン王朝のコインが、新疆ウイグル自治区や北部中国行政区域から発掘されたという事実からすれば、この発見は特別珍しいものではない。しかし、ペーローズ王の在位期間によって、この墓の製作年、467年から70年までという推論が補強されるのである。発掘された67個の副葬品の中で、4個のみが粘土製で、9個が青銅製の器か厨房道具であった。9個の金コップと1個の銀製のコップがあった。1個の琥珀のビーズ、2個のクリスタル、3個のパールに、2個の青銅製のヘアピンなどは妻の所有であったに違いない。3個の相似形の青銅製の透かし細工の飾り板、透雕銅飾には尻尾を絡み合わせ、外に向かって卵型を作り、その背中に尖った羽根の鳥を乗せた龍が向かい合わせに描かれたデザインになっている（図10）。そして、その中心線上の中央には立位の男性像が陣取って、手を腰に当てひじを張り、脚を広げて、見るからに挑戦的なポーズをとっている。頭上に置かれた肉髻に似た物によって、その人物像が仏陀その人を造形したかのようである。恐らく棺の側板を飾っていたのであろうか、二枚の四角ばった透かし彫りの飾り板・透雕銅鋪首には、ぎらぎら光って睨むような眼差しの巨大な龍の顔らしきものが配されている（図11）。これらの像の上端には、それぞれ別の立像の仏陀が添えられている。漆棺の上には二人の守護神以外には仏教と関連したものは全く描かれていない。これら李順氏の五枚の漆画棺板からは、佛教の痕跡を推測させるものを何となく認識できるが、これは馮素弗の墓室にあった四角ばった金色の“山の形をした”銘板ともどことなく似通っている。馮素弗の銘板には横を向いた従者を二人そばに置き、火焰状の光背に囲まれて胡坐を組んだ仏陀が描かれているが、完成品は稚拙なものであった<sup>(6)</sup>。

李順の墓には、豊かさの尺度でいえばその底辺とされるものには無紋の鉄の鏡に、鉄剣や短剣、そして鐙や、鉄製のカップ3個、鉄鉢や鉄杓なども含まれていた。

〔彩色木 棺〕

木棺には夫婦の骨片が残っていて、夫の木棺には漆が塗られていた。妻の木棺の方はひどく傷んでいた。夫の木棺も崩れ始めてはいたが、彩色木棺の断片には金を使用して高尚化され、多彩色に装飾化されていて、木棺全体の模様を確認するのに最低限必要な分だけが残っていた。浸水による損傷はあったが、男性の棺の大きな断片三カ所分と、それより小さい断片の幾つかが損傷を免れ、色づけされた中央の図柄の大部分が良好な状態に保たれていた。遺った物は木棺の四つの主要部、すなわち棺蓋や側面板や前面板（前檔）に、さらに後面の彩色を施された部分であったので、木棺漆画を全体的にも完全な形に再現することができたのであろう<sup>(7)</sup>。部分、部分が独自のテーマで描かれた絵柄であったが、全体を通じたスタイルは全く同じものであった。その構成は赤を基調とし、続け書きで黒の縁取りをし、青色、緑色、黄土色、黄色、

白色、黒色そして金色で、人や物を色付けしている。人物描写の場面はおよそ幼稚で単純な描き方をしている。装飾的なデザイン部分は多少慎重に描かれているので、当然ながら別の画家か、或いは他の複数の画家の筆によるものと思われる。

木棺の蓋の先端は、幅広く前面で幅が180cmあり、後方に行くとき先細りして105cm幅となっている。長さは1.8mである（図7）。蓋のまわりには渦巻模様の縁取りが施されている。前面近い部分は、二つ場面が釣り合った形を採っていて、伝説上の中国式廟・それぞれには軒縁が付き、ごく一般的な北魏式の簡単な張り出しがあり、両尖端のコンマの形をした頂華を支えて反り返った形のタイル葺きの屋根が描かれている。それぞれの屋根の棟の中央部分には、羽根を広げて前方に長い尻尾を付けた鳥がいる。

小さい建物・祠堂の内部のカーテンにはリボン状の留め飾りがとりつけられている。左手の祠堂に坐っているのが天帝・東王父であることは黄色のカルトーシュの中に見られる銘文から判断できる。東王父は縦長の黒い帽子を被り、長い袖のガウンを身に付けている。彼の両手はゆったりした袖の中で組み合わされている。彼には室内で二人の女性が近侍している。

画面の右側には女性が坐っている。その銘文は相当の損傷を受けているが、西王母であることは確かである。その人物もまた縦長い黒い帽子を被り、中国式のローブを纏って、その手は膝のあたりに置かれている。ただ一人の、それも女性の従者が西王母の祠堂の内側に配されていて、祠堂の外部には近侍する人物が一人だけ見られるが、その人物は男性で長いスカート式ローブを纏っている。屋根を越えて遙かに後方両側には鳳凰の横顔が描かれている。

漆棺の蓋全体を二分して二つの祠堂を切り離すのは、曲がりくねった螺旋状のリボンであり、その幅は7-9cmである。黄土色の背景に固く渦巻き状に巻き付いた黒色線が赤い点状の中心部分を囲んでいる。その隙間には魚、家鴨、白鶴などが飛び飛びに配置されている。これは天の河、あるいは天漢、われわれがいう銀河に他ならない。祠堂の上部のリボンの前端の横に当たる部分には二個の円板がある。左にある太陽とおぼしき円形のものには三本脚の鳥が描かれる、その一方で月盤には野兎の描かれた跡がかすかに残っている。漆棺蓋のリボンの両側は共に花模様で満たされているが、その花模様は円く繋りながら作る菱形模様が全体を形作り、その菱形の中には木の葉や、動物、そして自然の鳥や人頭の鳥などが釣り合った形で描かれている。そしてそれらの隙間はブドウの蔓のような巻き鬚様のもので埋められている。

#### 〔前端（前檔）部〕

漆棺の前端・前檔部分は計測すると高さが52cmで、幅は66cmであるが、かなりの損傷を受けている。前檔部画面の頂上近くに、詳細に見れば天帝に似てないこともないように墓主が平屋の建造物に座っている。その建物には青色タイルを張りつけた屋根と弁状の頂華のついた棟に中国式とは違った腕木が描かれている（図9）。軒下にはカルトーシュがあるが、もはや判読可能な銘文は刻まれていない。埋葬者は低い扇形のへりをつけた黒い台座に坐っているが、膝を広げた形で、足裏を合わせた格好をしている。右の手はカップを掲げた格好をとっている。

左手には「蠅を払う鹿の尻尾（塵尾）」（これに似た物品は葬具の中に発見された）〈訳者注－『固原北魏墓漆棺画』の「随葬器物」の文中では、「木柄：一个（前略）…可能是塵尾木柄残断、（後略）」とある〉を握っている。埋葬者は鮮卑族スタイルの衣服を身に付けている：即ち、縦長の帽子、長く細い袖の、ベルト付きのチュニックを着て、乗馬靴を履いているが、これはおそらく拓跋部の支配者を満足させるためであったろう。西暦486年の、正式の中国式服を拓跋部の公式行事に採用する以前には、中国北部では膨らんだ袖の長い礼服・ローブは滅多に見られるものではなかった。鮮卑族の服装は、例えば朝鮮通溝墓の壁画<sup>(8)</sup>に見られるようなものがあり、484年と日付された司馬金龍の粘土製の小立像（彩色屏風ではないが）<sup>(9)</sup>にも、そして487年の拓跋部の皇子から贈られた敦煌の刺繍に縫い採られた施主の女性などといったものでも同様に見られるものである<sup>(10)</sup>。神殿の脇には二組の男性の従者がいる。右の男性たちはズボンとブーツを履き、ベルトの付いたチュニックの狭い袖に両手を入れて立っている。左側の従者たちは女性のようなものであるが、襷つきのスカートの上からベルト付きのチュニックを身に付けている。建物に最も近い人物は縦長い帽子を被り、手には長細い首の酒瓶を持っている。

漆棺前檔部の破壊されて残った中央部分の断片の両側には、上方に二人の筋骨逞しい門衛がいるが、白い顔で口髭、山羊髯を蓄えていて、その外見から中央アジア人と思われる（図12）。彼らの長い頭髮は束ねられて頭頂で髻にされ、王冠は被らず、宝石やスカーフを身に付けている。彼らには光背や光輪もある。墓の記事によれば、痕跡は残っていないが、二人の人物の間には仏陀が存在した可能性が示唆されるし、それ以上に象徴的な玄関が存在しそうにも思える。遺残物の細部の描写からすれば、これら門衛たちは甘粛や五世紀初期の中央アジアの飛天、特に東甘粛の炳靈寺の洞窟169、敦煌の北涼の礼拝堂272、275、中国中央アジアのキジル族の洞窟などの飛天像とかなりの部分で共通している<sup>(11)</sup>。

漆棺側板の最大部分の一つは高さが27cmで、長さが195cmであり、残る一つが高さが61cm、長さは175cmである。これら遺残物から判断すれば、漆棺の側板の記録は三つに分けられる（図14）。側板の一番大切な区域には、孝行・孝子伝が描かれているが、英雄的な行為の場面が少なくとも一つは加えられている。側板の中央区域には、半身大の人物を二人収めた長方形の“窓”があって、その窓枠は波形の、魚を囲んだ模様で描かれ、側板の真中の位置を占めている。残りの部分は、真珠をちりばめた円形パネルで満たされ、そのパネルには様々な主題が銘記され、裸身の天人、人物像、動物そして怪物などがペアを組んで、顔を突き合わせた状態で、宝石入りの網の上張りに被われている。底辺の図柄は、龍や鳥や鹿などが型どおりの山岳的地形の中を歩き回ったり逃げ回ったりしていて、騎乗した射手かそれとも槍使いがギャロップで追っかけているといった狩猟グループの絵柄として描かれている（図2、13）。

孝行説話は、赤を基調にした画面に全身像の人物を配して順序正しく語られてゆく（図1、3-6）。縦に長い髪型と帽子が黒で表現されているが、鮮卑族スタイルの衣服の色は多彩である。黄色のカルトーシュに対して稚拙な文字で、猶且つ不正確ではあるがインキで記された銘文記

事がその場面を説明してくれる。規則的な間隔を保って、棕櫚の葉をモチーフとした左右対称の連続模様と渦巻きで満たされ、青か赤の炎で縁取りされた黄金色の三角形によって説話が分けられている<sup>(12)</sup>。

[孝行シーン]

中国で起こった戦争や、反乱や、山賊行為や自然災害などに拠る破壊を考慮に入れば、前-湯王の親孝行のシーンが少ないのは驚くほどのことではない。黄金期の皇帝であった舜から始まるとされる親孝行の模範例などは古代著作の中で賞賛され、世にも知られている。不条理且つ残酷な親たちに対してさえ、子供が従順な役を演じることは、ある意味では父のような統治者と被統治者との理想的な関係を示す模範例でもあった。孔子による儒教の經典四冊の内の一冊は、詳細を極めた定義づけをして親孝行について論じているが、驚くことに孝行息子の姓名を挙げていない<sup>(13)</sup>。このような模範的な説話、あるいは又、精神的圧迫に遭う中での善行として引喩された美談・佳話や、その他に著名な男性や女性についての詳しい譚など一十世紀の『太平御覧』で形を変えて書き改められた話—には歴史上いろんな所で出会うことができる<sup>(14)</sup>。よく知られた最も古い説話は漢王朝のもので、他の儒者（あるいは反孔子論者）のモデルと組み合わせさせた形で発見されている。西暦二世紀に作成されたとされる儒者たちの国・魯の靈光殿のよく知られた記述では、その神殿の壁画の中で、貴族たちの“肖像画”や親孝行な息子たち、そして学者たちや著名な婦人たちを描き、天空と大地（宇宙・万物）を祝して、野獣や怪物や古代の半身人間像などで補って完璧なものに成っている<sup>(15)</sup>。徳が高いと称された人々の“肖像画”は、現代の四川省で当時の蜀の首都において、儒家の英雄・聖人とされた周公旦に献呈された三世紀の“歴史的な”フレスコ壁画の中に描かれていると言われる；即ち、造物主・盤古が去って、伝説的な三皇がつづき、五人の黄金期の皇帝・五帝、夏、商、周王朝の支配者や著名な宰相たちの時代が来たが、その時には正に孔子自身が70人の門弟とともにその絶頂期を迎えていた<sup>(16)</sup>。このような芸術を成し遂げた功績と、教訓や課題について長く沈思黙考・思索した上で完成させた業績は素晴らしいものであった。この事について、三世紀の魏王家の皇子・曹植は次のような評価を下した：

“三人の皇帝と五人の帝王たちを尊敬の思いで見なかった者は誰か？王冠を奪い宰相の位を強奪した絵図を見て齒ざしりしなかった者はいない…そして抹殺された宰相や虐げられた息子たちを見て溜め息をつかなかった者は居なかったであろう…<sup>(17)</sup>。”

学者・劉向（紀元前80－09年）によって纏められ、漢代中期の子供の孝行シーンの挿絵のついた古典の教本があったと信じられているが、その確証は未だ得られていない<sup>(18)</sup>。

芸術上の独立した主題としての孝行息子たちは、筆者の知るところでは、九世紀半ばの画論書『歴代名畫記』に初めて記述されているが、三世紀の芸術家として登録されている謝稚は、貞淑な女性たちの仲間や塾を開いていた孔子とともに記載されている<sup>(19)</sup>。英雄や隠遁者らとともに、模範になるような孝子たちの漢の時代の作品例は少ないが、一世紀の作とされ、北朝鮮

の古代楽浪で発掘された柳製のバスケットの上に付けられた模様入りの縁飾り・楽浪彩篋がその稀な例として発見されている<sup>(20)</sup>。ずんぐりむっくりした形の人物像は、現代においてはほとんど引喩以上のものではないが、役を演じているというよりも、むしろ型に填った相手と坐って会話しているといったところである。その中に例外が二つある：即ち、邢渠は前屈みになって年老いた父親に一心に食事をさせているし、丁闢は自分で刻んだ木の彫像を死んだ母の代わりにして、“奉仕に一所懸命なのである”。石に、曾ての石壁に、それも武氏一族が山東に奉納した祠堂の石壁に彫られた七人の孝行息子たちは、最小限の小道具として単純に表現されているにすぎないが、楽浪彩篋の例以上に東漢の孝子の例について多くを語ってくれる<sup>(21)</sup>。

孝子・孝行というテーマが六朝時代を通じて継承され続けたという事実は、いくつもの例で明らかにされているが、その事実の実証に当たっては、多様に変化する主張・要求に適応じられるように十二分な注意を払った上で行なわれるべきである。次の二カ所の発掘は整然と行われた。一つは、鮮卑族拓跋部の首都で、朝臣であった司馬金龍の中国式と鮮卑式を半々に合わせ持った(484年と銘記された)墓から発掘されたもので、彩色の屏風の断片であり<sup>(22)</sup>、西暦500年頃の製作と年代が推定されるもので、もう一つは河南の鄧県の墓穴から発掘された二個の絵付けの石板・タイルであった。後者の墓の主は、恐らく南斉王朝(訳者注：479～502年、蕭道成によって宋王朝が覆されて、南斉が建国された。首都は建康、後の南京である)に出仕していた南朝系の支配階級の一人のものとされる<sup>(23)</sup>。カンザスシティーのネルソン美術館所蔵の石棺の側板の彫刻は西暦550年頃のものとしてされるが、形と質と共に完璧なものである<sup>(24)</sup>。しかし、一方で、ミネアポリス美術協会所蔵の石棺の画像には、判じ物風な彫刻が施されている。この石棺は売買業者から入手したとされるが、北魏末の形態的な特色を示すところから、遺された断片などから見ると多分に急造品か、あるいはぞんざいな複製品とも思われる<sup>(25)</sup>。さらに疑わしい代物は、売買業者の C.T.Loo からボストン美術館が手に入れた石板四枚である。これらは一見して分かることだが、未熟な腕で彫刻された十人の孝子・孝行場面の石板なのである<sup>(26)</sup>。ネルソン美術館が所蔵する第二番目の石棺については、根本的には以前の収蔵品とは異なり、年代的にも数十年後のものと思われるので、ここでは敢えて触れないでおきたい。

これらはほぼ同時代の作品の中の孝子・孝行をテーマにした作品の選び方や処理の仕方は、この固原の漆木棺の残存断片の場合と比べると正に対照的であった。同じ孝行説話でありながら細かい点では違って、孝行息子の選び方も異なっていることの意味するところは、固原の図版には源泉(作業場の実物大の下絵?)が単一ではなかったことを明らかにするものであった。一つの模範的な作品が、中でも舜の物語がいくつかの作品の相当部分のスペースに提供されている一方で、幾つかの別々の孝行物語に同一の場面が供与されてもいるのである。その細部の描写は他に比べようがないほど高い価値あるものであるが、一つ、二つ、あるいは三つの場面のそれぞれがネルソン美術館所蔵の初期の一連の石板上に見出され、タイル一枚に一場面を、そして484年の屏風の現存部分に三場面を見出すことができる。固原の発掘物に見られる五

人の孝行息子たちのうち、三人がネルソンの石板上に、そして鄧県発掘のタイル上にも一人登場するのである。

上述したこれらの作品がおそらく今日我々が目にするものである。最も信頼できて、且つ最も精巧とされる作品は、比較的初期のネルソン美術館所蔵の棺に見られる作品であるが、それは北魏最後の首都“洛陽”から発掘されたといわれるものである。最も信頼性がある最も美しい絵柄は、大王・禹の母とされる淑女を描いたものと、司馬氏の屏風の残存断片の頂上部分を占める立像である<sup>(27)</sup>。屏風の残り部分の場面とタイル上に刻まれた鄧県の磚はかなりの出来である。最悪の絵は固原発掘の孝行場面を描いたもので、班夫人が皇帝の庭園の輦に同乗するのを遠慮するといった馴染みの話を描いた司馬氏の屏風の底部に記録された場面の絵である。

絵画や彫刻などを合わせた芸術作品すべての中で最高級なのは現時点では最早存在しないとされているが、483年に拓跋の首都に建立された式場用の宮殿ホールの壁の装飾や、北部中国の女帝・馮女史の墓所の大理石の屏風をずっと華麗にしたものが、六世紀初期の地誌の水経注には掲載されている。後者の大霊廟は484年に首都の郊外に完成したとされている<sup>(28)</sup>。これらの画業は張僧達や蔣少游らの手に成るものであった。そのうち後者は山東省から先の南部の人であったが、北魏政権でのその人生は囚人や奴隸として始まり、暫時徴兵されて極北で軍人として仕えたが、最後は宮廷で高い位の芸術家として生涯を終えたのであった<sup>(29)</sup>。その絵画は“古代名士—忠実にして勇敢な人物の一像”を描いた。即ち、画面は浅い浮き彫りで、“忠実な子供としての孝行者の表情”を表現した。そして、その彫像には“徳が高く親に忠順な人たち”との刻印が施されている。

上記のような儒教的徳育に重点を置くものと啓蒙上対照的なものとして、五世紀の三人の南朝の皇帝たちの霊廟に印刻された銘板上の装飾絵画—その絵画では“七賢人と竹林”が描かれて、七賢人が酒を飲んだり、音楽を奏でたり、瞑想したりしながら、木の下でぶらぶらと遊び興じている絵が描かれている—を目にすることができる<sup>(30)</sup>。鄧県の南部人の墓には同じような非道徳的な快楽主義的な人物様のものが描かれている<sup>(31)</sup>。一つのタイルには、四人の男性がゴツゴツした岩を背に寛いでいる様が描かれている。その内の一人は、琴を奏でて、もう一人は笙、即ち“口で弾くオルガン”を吹いている。彼らは伝説上の、“商山の四人の賢人・四皓”であり、曾ての秦王朝の学者であり、秦のきびしい管理体制下で耐え忍ぶよりもましと、山に隠遁したと言われている。他の二枚のタイルは、現実からの逃避者の戸外生活をテーマとして描いている。道家、隠遁者の“王子喬”が画面の左手に坐って笙を吹いている一方で、不死鳥が彼の目の前で踊っている。画面の右手には笙の音を聞こうと近づいている道家・不死の人の立ち姿が見える。

469年という年に蔣少游が捕虜になったという事実も又、注記されるであろう。何故ならば、466年に始まった北魏政権の東部や南部への、一連の外征末期の、大量の“宋”の降伏者の中には蔣少游も入っていた。蔣少游が、もし483年までにその不運を完全に克服して画人として神殿



の壁画を任されたとすれば、その時点までに熟練した助手集団を集めたに違いない。そしてその画人たちのうち大半は南朝出身者であったろう。この点は大いに注目すべき価値がある、それは筆者が現時点で、この墓の完成の最終年限を484年としたい理由として、屏風全体を通して尋常ではない画業の質の高さが見られるという事実があるからである。司馬金龍は北魏の宮廷では社会的にも重要人物であった。彼・金龍は、晋代王家一族の外戚で南朝からの亡命者でありながら北魏でも重用されて拓跋の皇女と結婚した人物・司馬楚之の息子であった。息子の金龍はつづけて二人の妻を娶ったが、その二人とも元遊牧民族の族長の娘といった高い地位にあった。最初の妻は474年に葬られたが、のちに夫とともに再埋葬され、二人目の妻は十年後に埋葬された<sup>(32)</sup>。この屏風は二番目の妻のもので、恐らくその生涯にわたって使われたことは明らかであろう。その訳は、この屏風絵が名人級の画家と青二才の弟子との間に存在する技術差を雄弁に語っているからである。新たに捕えられた多くの南朝人がその能力によって高い評価を受けるよりずっと以前に、このような技術力の較差は、上流社会において正に認識されていたようである。この屏風の場合、製作年より数年前に捕虜になった南朝人が匿名で屏風製作の責任者になっていたのかも知れない。

漆木棺の右側の頂上部の記録には、十一の孝子・孝行の場面が残っている。その内の八つは孝行息子・舜の一黄金期の帝王であり、その傑出した人格によって、帝王・堯から帝位継承者として選ばれた一説話である(図3、5、6)。古典的歴史書は、彼の父や継母の残虐ぶりと彼の善行とを簡潔に対照化し、際立たせている。舜は最終的にその善行によって父や継母を説得して前非を悔いさせたのであった<sup>(33)</sup>。中国初の歴史学者で西漢中期の人・司馬遷には、舜の父は妻を亡くし、年老いて再婚するが、父の再婚相手は男の子を身籠もるや否や舜を憎み始めたとの解説がある。劉向(烈女傳、西漢後期)は、その著名な女性説話集成の中で<sup>(34)</sup>、堯はその二人の娘をその後継者・舜に贈ったこと、その舜はその兄たちの謀略の裏をかいて三回も危機を逃れることができたこと―穀物倉庫に火を付けられた時や、井戸で溺れさせられそうになった時や、池で二度目の溺れ死にさせられそうになった時で、この時舜の父は、舜を泥酔させようとしたこと―などと語っている。

六朝時代を過ぎると、この説話も次のようになる。両親が舜に家族用の穀物倉庫の屋根の修理に屋根に登るように命じるが、舜が屋根の天辺に届くと同時に倉庫に火をつけたというものであった<sup>(35)</sup>。さいわいにも、少年・舜は二個の竹製の帽子をもっていたので、その竹製の帽子を羽根のように広げ、空中を浮遊しながら地上に下りることができたという。漆棺上には、裸の少年が焰を上げている屋根から飛び下りようとしているところが描かれている。穀物倉庫は隅棟のある、頂華の付いた、腕木のある、室内の空いた椅子が見えるように開放されて―今日の漆棺に見られる全ての家屋や神殿などと同じように―屋根の付いた小型の模型のような家として描かれている。舜の継母は下の方に立っている。稚拙な筆跡で書かれた銘文によれば：“継母が穀物倉庫に火をつけて舜を殺そうとしている時”とある(図3)。

第二の場面のタイトルでは次のように説明されている；“舜が黄金の宝物を井戸に入って取ってくるように命じられた時；舜が黄金を手渡すや否やその井戸は大石で塞がれてしまう”と。司馬遷による説話の翻案では、舜は井戸の壁に穴を見つけ、その穴を這って行くと隣家の井戸にたどり着き、無事に脱出できたという。漆棺上のこの一連の説話はひどい損傷を受けていて在るべき人物像が失われている。損傷部分に接した部分の墓誌からは、“舜は絶体絶命であったが、なんとか隣人の井戸を通して逃れ井戸から脱出できた”と、読み取れる。ここにも井戸が再び描かれている；並んだ二人の人物は、鮮卑式のチュニックと丈低い帽子を被り、胸の前で指を組み合わせた姿勢で立っている。井戸の左側から飛び出しているのは裸の少年・舜である。

間に挟まっていたシーンが失われたのかも知れないし、元々描かれていなかったのかも知れない；そのシーンでは、舜が亡くした母の靈魂と情報を交わした後でどのようにして歴山（舜耕山）の農場に行ったのか、また他の地域では収穫が少なかったにも拘らず、舜の場合はどうやって牧畜の数や収穫量をふやすことができたのかなどが語られているのかも知れない。舜の父親は貧乏になり、盲目にもなったし、舜の継母は発狂し、木薪売りにまで落ちぶれていた。漆棺の次の場面では、父親は独り室内にいる。その画面に続きに、独りで一抱えの薪の束を運んでいる女性が見える。銘文は赤裸々にその事実を語っている（図5）。

話は続き、市場へ出かけた舜は薪売りが自分の両親だと判ると、一抱えの薪を普通よりずっと高い金額で買いもとめる；榜題には20倍の値段で買ったとある。両親は息子・舜はすでに死んだものと思い込んでいたので、買い手が舜だとは思ひもしなかった、しかし結局舜だと悟るのである。簡潔な叙文がつき、各場面には三人の大人が居るという事実によって見分けがつくが、漆棺上の三つの場面にはこの例のように絵画としては格調の低いものが割り当てられている。

次の一連の絵画は、孝子・郭巨の説話を描いたものであるが（図1）、この話は干寶による四世紀の書・『捜神記』や、また『太平御覧』の中で再び形を変えて語られている<sup>(36)</sup>。郭の一家は大変裕福であったが、族長がその財を勝手に処分してしまって、郭にはその母親の世話をする責任だけを残したことは我々の知るところである。不運が続いた後、郭の妻は男児を生んだ。しかし、貧しい郭は子を養いながら母親の世話をつづけることは出来ないと考え、わが子を生き埋めにしよう決意する。その穴を掘っていた郭は黄金の一杯詰まった大釜（金釜）を掘り当てる。この事は次のように銘記される；“これは郭巨の孝行に報いるものである；彼以外にこの果報を受ける価値のある者はいない、彼からこの褒美を取り上げることのできる者は誰一人いない。”漆棺上にはこの一連の説話が三つのパネルに収められている。家屋内の郭とその母との関係を語るシーン（訳者注－幼学の会編『孝子伝注解』の郭巨の項の文中では、「図五左は、屋内で母に仕える郭巨」とし、その解題に「榜題〈孝子郭巨供養老母〉」の存在を挙げている。）から始まるが、第二の場面では、母親と息子がともに中国服を着て驚いた表情の様が描かれている。第三の場面では釜を掘り出した郭が最早手鋤を休めているのである。

次の説話は蔡順が孝子役であるが、彼の亡くなった母親の棺が未だ埋められていないのに、隣家の火焰が迫って延焼の危険に晒されている。しかし、画面が大きな損傷を受けているために、傍題の残りの部分にも場面についての記述はない<sup>(37)</sup>。

丁蘭は、母親が（父親という人もいるが）亡くなると、木に母親の像を彫り、母親が未だに生きているかのように事（つか）え続けた<sup>(38)</sup>。隣人が物を借りに来た時、母の塑像が許さず隣人は借りることができなかった。その隣人は泥酔した勢いで丁蘭宅を再度訪問した。そのとき丁が留守していたのを幸いと、丁の母親の塑像に向かって悪態をつき、頭部を打擲したのであった。帰宅した丁は留守中の出来事を理解して、剣を取って隣人を殺めてしまった。丁が牢屋に入れられると、母親の塑像は涙を流して悲しんだという。この説話には異説が多く、丁の妻がうっかりして母親の塑像の顔の部分焼いてしまった、その因果なのか妻の頭髮が全て抜け落ちてしまったともいい、武氏一家の石板に記された記憶すべき絵図では、丁が積み重なった雲に頭を置いているかのような肖像—即ち丁の父親とし銘記されている—の前にひざまずいているところが表現されている。しかしながら、漆棺の残った部分の碑文では、父親ではなく母親のことだと言っているのだが…。

上述した四人の孝子をテーマにした説話のすべてに固原の漆棺で語られる説話以外に六朝時代の特色とされる様々な異説が生まれている。司馬の墓に刻まれた舜についての一連の場面には背景は描かれていないが、井戸は中国式の小さなタイルの屋根で被われ、その屋根には似合いそうにない頂華が付けられていて、登場人物たちは中国式のドレスを着用し、帝堯の二人の娘たちは、背丈はかなり低く、丸々と太っているが、彼女たちの髪型は見事な出来映えである<sup>(39)</sup>。カンザスシティーの美術館（訳者注—ネルソン・アトキンズ美術館）収蔵の一对の石板には三場面が描かれているが、すぐ側を樹木や岩石などで密に飾りつけている；第二の井戸からの脱出が最前面に置かれ、落下する石がその背後に描かれている。背中を見せた姿の舜に娘たちを紹介している堯は、隣接した空間的な小房との中景に場所を占めている。人物像はすべて背が高く、上品でスリムで後期北魏の仏像のようである。堯にしても舜にしても、四場面すべてにおいて宮廷風の中国式ドレスを身に付けている。

郭巨の話についてのネルソン美術館の図柄でも又、三つの人物群と二つの空間を占める小房が用いられている<sup>(40)</sup>。郭の妻は跪いた形で赤ん坊を抱いているが、これ又背面から見た状態で、宮廷の侍女のようでいかにも不自然に見える。母親は中景の隣接した小房に居て、中国人官吏のように台座に坐っている；幸福な結末を暗示するものとして、母親が赤ん坊を抱いている。片方では、息子夫婦が黄金入りの釜を棒で肩に担って、画面の左手から意気揚々と近づく場面もある。

鄧県タイルには、郭（巨）だけが登場し土を掘っている（訳者注—幼学の会編『孝子伝注解』の郭巨の項の図四「10鄧県彩色画像甁」には、郭巨の妻と思われる人物像が見える。又この画像甁は文字が反転している。この画像甁は印刷用に使われたのだろうか？）。

蔡順の話はカンザスシティーの一枚の石板の中央に描かれている<sup>(41)</sup>。漆棺は屋根の付いた壁の無い小屋に置かれているが、これは透視画法であり、出来得るかぎり蔡の後ろ姿がはっきりそれと分かるように描かれている。因みに東漢の歴史は、漆棺が埋葬されるのを待っている間に火災に遭って破壊されてしまったと説明して、この訓話に言及している。ネルソン美術館にある石板のデザイナーは、右前面底部に、当該場面には場違いと思われる観察者として小さめの前脚をまっすぐに立てて坐っている犬を付け加えている。

固原の棺の二個の大きな遺残断片上では、尹吉甫の説話が語られている。尹は西周王・宣の支配下にあつて高官であつたが、この説話はその年長の息子・尹伯奇と邪悪な継母との話である<sup>(42)</sup>。この教訓は漢の時代から異常なほど沢山の教科書によって伝えられている。これは恐らく尹の高い身分や古代の文物という理由のためであろう；即ち、我々が目にする漆棺上に彩色された説話の翻案の一つは七世紀初頭の『藝文類聚』上で見ることができる。この藝文類聚は学者で能書家でもあつた歐陽詢によって編集された百科事典の一つであつた。それに拠れば、実子を持つ継母は伯奇を妬む余りに伯奇を辺境の地へ追放するようにと、その父・尹吉甫を説き伏せてしまう。辺境の地に到つて伯奇は自分の不運を嘆き続ける；伯奇はその辺境の地で良心の呵責に苛まれる父によって発見される。それは泣きつづける鳥に姿を変えた伯奇を目にしたからであつた。尹はその鳥がもし自分が見捨てた息子でなかったら、飛び去るようにと鳥に話しかける；鳥は飛び去るところか、降りて来て、父・尹の馬車の屋根に止まり、悲しげに歌い続けたのであつた。尹は家に帰ると直ぐに、妻に呼び掛けて弓と矢を持って来させるやいなや、弓矢で妻を射殺してしまった。

現存する漆棺の断片では、尹吉甫の説話はその半分も語られていない。切れ端の一つには馬に乗った宰相とその肩に鳥がとまっている絵柄が描かれている（図4）。もう一つの漆棺画片には鳥を背にした人物が第二の人物を狙って矢を射るところが描かれている。

その他に何が記されているのか判読の困難な漆棺画片が幾つかある。その中で最も判読可能と思われるものは、“一旦逃げた開疆ではあつたが結局自殺してしまった時”とある銘文の読み取りである。“二桃三士を殺す”と譬えられる故事物語を例にとれば、斉の宰相であつた晏嬰（晏子）は、リーダー的な存在がいなくて、同じような勇者が三人もいることは国にとっては却って危険だと恐れて、三人の中で国にとって最も大切な人物に与えたいと言って二個の桃を三人に手渡したという<sup>(43)</sup>。宰相は、三人の勇者の間に亀裂が生じて争いが起こるようにと計画を練つたのである。果たして、誰一人として他の二人に譲歩する者はおらず、結局のところ三人共自殺してしまったという。このメロドラマの後期西漢の翻案は、洛陽の墓M61のタイル張りの梁に描かれているが、そのレイアウトは固原の漆棺画片に見られるものと基本的には最小限の範囲では同じものであつた。

〔注〕

- (1) 固原県文化チーム、英文タイトル“寧夏固原県の北魏墓の発掘”(中国語)、文物、1984, 6, pp.46-56; また美術研究、1984. Luo Feng による英訳“北魏木棺の漆画”、オリエンテーション、香港、21巻7号、1990年7月、pp.18-29。(訳者注－革命文物は1976年から出版され、1980年からは考古與(与)文物と誌名を変えて出版されている)
- (2) A.C.ソーバーの“Whose Body? 誰の身体か”を参照。アジア研究(独語)／アジア研究(仏語) 44巻2号 1990年(ディートリッヒ・ゼッケル論文集、p.205-216)
- (3) 李順の伝記は魏書36と北部中国の歴史・北史33で語られていて、その息子たちについての短い記述も付けられている。
- (4) 馮素弗の墓については文物1973年の2-28頁で報告され、同書の1977年5月、pp.42-54で論議されている。それとともに考古学者・宿白によって鮮卑族の特質をもった他の墓についても論及されている。晋書125の中での素弗の略歴には、その兄弟・跋の略歴が続く；彼は415年に死去した。燕と称する幾つかの王朝が5世紀という期間を通じて北東地域ではつづいていた；それらの王国は慕容部の一門の鮮卑族の首領(彼らは自分を皇帝と呼んだ)によって支配されたが、彼らは拓跋部と従兄弟同志であり、ライバルでもあった。漢人・馮跋は最後の王を殺害したが、王朝の名はその儘にし、その息子が北魏によって王位を奪われるまでの28年間王位を保った。馮跋と馮素弗はそれぞれ馮氏・太後の祖父であり、大伯父であった。その馮太后は李順の息子と余りにも親し過ぎたとされる(そして、馮太后は漢人であったにも拘らず、それ以降490年に死去するまで摂政として魏を支配した)。
- (5) コインの図像学的研究のためには、Edith Porada の古代イラン、ニューヨーク1965年、p.2011を見よ。考古学ジャーナル・考古1966年4号 p.211 以下の頁には新疆区(中国中央アジア)のササン朝コインの最近の発掘と題した、夏鼎による論議が含まれている；同書の1974年2号 pp.26-32に、より多くの幾つかの発見物が北部中国固有のものと報告されている。
- (6) 馮素弗の銘板は文物の1973年3月号 p.25の図7/2では、ただ曖昧模糊とした図版が入れられているが、同書の1977年5号 p.45図4では線描されている。
- (7) 文物1984年6号 pp.54-56では、固原の棺蓋の正確な描画と棺の前档と両側板の絵柄の残存した大きな断片が提供されているが、写真技術は水準以下である。より明瞭なカラー写真が美術研究とオリエンテーション論文で再製作されているが、色合いは明らかに種々様々である。
- (8) 通溝の例としては、池内宏の満洲国通溝省輯安県高句麗壁畫墳(輯安県の高句麗の遺物)東京と京城1936年、製造物責任、29(xxix)。
- (9) 当時、北魏の首都(現代の大同－訳者注－当時は平城又は万年)の郊外にあった半漢人式、半鮮卑式の顯官・司馬金龍の墓(484年の日付がある)から発掘された、文字通り掘り出し物については文物の1972年3号20頁以降の頁と、同書の8号 pp.55-58で報告されている。ニューヨーク大学 IFA の Lucy Lim の論文(1989年1月)“司馬金龍の北魏墓と初期中国人物画”のp.35以降の頁も参照；又、注22、29、32をも参照。
- (10) 敦煌美術協会は文物の1972年2号の54-60頁で刺繍の掘り出し物について報告を行なった。その報告については、Albert DienやJeffrey Riegel 更に Nancy Prince の編集によって1985年にロサンゼルスで発行された中国考古学抄録34漢以後の pp.1549-1554 で詳細に報告された。

- (11) T.秋山と、S.松原の中国の美術 II （東京、1972年、A.C.ソーバー訳）を見なさい：炳靈寺には図版73-75、敦煌には図版1-2、5-6、キジルと類似する物については、H.Hartelの古代絹の道に沿って（1982年、ニューヨーク）の図版31、35を参照。
- (12) 梅原末治の北蒙古のノイン・ウラの掘り出し物の研究（東京、1960年）、墓#6から発掘された絹の刺繍については図版24を参照；より新しいものとしては、Loubbo-Lesnitchenkoの“発掘の中国絹織物刺繍”（*Artibus Asiae* X X VI[26], 3-4号, 1963年, pp.181-90, 図版1-3）を参照のこと。その刺繍は、驚くほど複雑であり、疑いなく中国からの輸入品であり、棺を包むために使われた。その刺繍上の三角形の帯は駆使された中心となる図柄のすべてを極限までに単純化した縁取りとして用いられている。二つのV字が内部に向けて指し示されたものから成り立ち、真珠と小さい渦巻き状の模様で見分けられることで、たとえそれが500年以上も前に作られたものであったにしても、その刺繍は間違いなく棺の縁取りの原形であるといえよう。日付は西漢である；即ち、埋葬された族長は恐らく匈奴の支配領域のかなり広い部分を支配していたのであろう。オリエンテーション論文の著者は、“匈奴の貴族の紀元前4世紀の墓”について言えば、ノイン・ウラとパジリク古墳群とを混同したのかも知れない。
- (13) 孝経は孝行説話の古典であり、孔子に拠るとされる典籍の一つである。訳書については、東洋の聖典叢書の中の、James Leggeによる孝経第Ⅲ巻（1878年ロンドン、1962年デリーで再版）を参照のこと。
- (14) 太平御覧、昔の文学から引用された名文・名詩などの一節を編集した類書が皇帝の援助の下編集され、973年に完成した。この書は“一般的な教養の幅広い基礎”となり、このような事がなければ失われたであろう著作・作品のたとえ断片であっても保存することとなった。Ssu-yu TengとKnight Biggerstaffの中国参考作品精選目録, Cambridge, Mass. 1950 p.113を参照。
- (15) ソーバーの“初期中国の風景画”、(*Art Bulletin* 23,1944, p.144) を引き合いに出せば、この著書は大アジアⅢ（1926年, p. 31, ff.）でE.von Zachのドイツ語訳された詩を下敷きにしているという。
- (16) William R.B.Ackerの唐朝と前唐朝の中国絵画書籍 Leiden1954, I, p.109 (quoting the Yu Hai of Chang Jung 444-97)
- (17) 上記同書でAckerは、9世紀半の張彦遠によって書かれた歴代名畫記と称される本を“絵画の起源について”と彼自身にとって基本的な歴史観をも付け加えた。
- (18) Wu Hungの武梁祠、Stanford1989, p.272を参照。
- (19) Ackerの上記同書Ⅱ（厳密な意味での歴史）の図版73-74。
- (20) 浜田耕作の出版した楽浪彩篋塚出土彩画漆篋の墓、楽浪彩篋塚、京城1934年、図版 xli-xliv （41-44）（xliii （43）は邢渠の、xliv （44）は丁蘭の図版であり上段の右端に見られる）
- (21) Edouard Chavannesの北部中国の考古学の使命（Paris, 1909-15年）は、武氏一族の墓地から出土した画像石の徹底的な図形化、その見事なまでの研究業績の標準句である。長廣敏雄の漢代の画像研究“The Representational Art of the Han Dynasty”（英語の要約付記）、東京1965年には、武梁祠の43の場面についての図解的解釈の章が設けられている（pp.61-95, WuHung, op. cit.（随意的引用図例）pp.180-86）。
- (22) 上記脚注の9参照。司馬金龍の父楚之は中国全土を265-316年、中国南部を317-419年まで支配した種

族の亡命した御曹子で、東晋の最末期の年に彼の男系の親戚縁者の大量虐殺を蒙って北部地方へ逃避したのであった。恐らく政治的な理由で、彼は北魏から熱狂的な歓迎を受けて迎えられたが、彼の後半生は南朝との戦闘に費やされ、拓跋部皇女を妻として与えられ、皇帝墓域内に葬られた。彼の息子、金龍はその父の能力の欠片も持ち合わせないで、名誉だけを受け継いだのであった。金龍については、その父の伝記の末尾の魏書と北史で短い記述がある。屏風絵についての詳述は、次にづくp.10, 11, 12 と Lim の学術論文の p.35以下を参照。

- (23) 鄧県墓に関しては、Annstte Julianoの鄧県を見よ、重要な六朝墓 *Artibus Asiae Supplementum XXXVII* (37), Ascona1980, pp.67-68, 年月日と作者の時代特定についても同様。絵付けされたタイルの中から二枚の模範例は郭巨と老萊子であり、図71-74に示す。長廣敏雄が六朝美術の研究、東京1969年(英文の要約もある)の中で、蒐集した孝行説話の全ての登場人物は有用である。長廣は鄧県のタイルについても論及している。
- (24) カンザスシティーの(ネルソン・)アトキンズ博物館の、ネルソン美術品ギャラリーの手引き書(5版、1973年)Ⅱの44頁にある。ネルソン美術品展示室の画面様式の分析については、ソーパーの“風景画”の pp.141と以下の頁に提示されている。又、“初期中国の具象的美術における生活動作と空間感覚”については、“*Art Bulletin* 芸術紀要30”、1948年の pp.167以下で提示されている。カンザスシティーの石(棺)については、日本の市井の研究者、奥村伊九良によって、素晴らしい出来映えの拓本と共に、“*Urinasu* 瓜茄”誌上で京都で1939年に発行された。石(棺)の両側板については、長廣の六朝の図版37、38でイラスト化されている。そのp.181を参照。そこには、作品の完成度、進歩が見られることから、北斎の初期の作品であるとしている。
- (25) 1948年6月、ミネアポリス美術協会会報37/23中で不完全ながら披露されている。奥村によるもう一つの初期の研究は、前掲書中で、長廣によって—図版35、36、図解48-50、xxi-xxii (21-22)、pp.178-81—十分よく心を用いて取り上げられている。脚注75をも又参照のこと。
- (26) 中国彫刻品の公開・展示 (figs. xxix-xxxii (29-32)) が、売買業者の C.T.Loo の1940年のカタログで示された。長廣は図解39-42で例証し、ついでに pp.177と xxi (21) でも触れている。長廣は小型模型の石作りの祠堂の、ボストン美術館の第2番の孝行画の論証を拒否する。
- (27) 文物1972年3号の最初の報告では図解化されていないが、人民畫報、北京、1971年1号と人民中國1971年10号では、カラーで大きく例示されている。Limの論文のpp.60-61を参照。
- (28) 絵図も彫刻もともに酈道元による水經注(Ⅲ, 13)、北魏末の地誌に記録されている。皇太后の大靈廟の銘記は Archibald Wenley によって、“より自由の折々の記、備忘録”1947, p.11のなかで、“文明太后とFang Shan 方山の共同墓地”と題して翻訳されている。
- (29) 画家張僧達については何処にも記録が残されていない。蔣少游については魏書91と北史90に伝記が記されている。その彼の異常な人生についての両著の記録は Lim の論文中のpp.164-65 に要約されている。歴代名畫記Ⅷ(AckerⅡ, pp.187-88)は彼を卓抜した芸術家と語っているが、彼を反逆者であると重い審判を下してもいる。
- (30) 姚遷他の編集、六朝美術はアルバム形で再版された(北京1981年、図版162-79、183-88、216-23)。発掘されたものの中で最初のものは、“有名な文学上の主題の最初期の表現”(Artibus Asiae XXXIV [34], 2, 1961, p.79以下で)という、ソーパーの論考で論述されている。

- (31) **Juliano**（〔脚注23〕を参照）の鄧県の9, pp.55-56と図版73を参照。
- (32) 1972年の文物（3, pp.26-28）の墓の掘り出し物に関する報告は墓葬品の絵柄にグループ毎の様式上の違いが見られるという。474年の墓の埋葬品の絵柄が違うことはその本来の墓の所有者によって再埋葬されたことを暗示するものとする。二人目の妻の墓誌は金龍の墓誌とともにpp.26-27に転写されている。
- (33) **Jas Legge** による初期の翻訳、書經、中国の古典、Ⅲ, 1, pp.26-27（原本は1865年にロンドンで出版されたが、ここでは1939年の香港の再版で調べた）にある。史記の一節は伝説上の五代皇帝に関する項で、第一章にある。
- (34) **A.R.O'Hara** の翻訳、列女傳による初期中国における女性の地位、台湾、1978年（pp.14-17）による。
- (35) 固原の棺の舜についての一連の挿話は、オリエンテーションの21巻、7号 即ち1990年7月号のp.23、図版7-9中で、色付きではあるが不鮮明な図版化である。
- (36) 郭巨の一連の挿話は、同書の図版10で紹介されている。干寶は、中国書誌学辞典（原著の序文は1898年であるが、1962年の台北の再版本を参考にした）で **Herbert Giles** による大変短い記述の対象者である。
- (37) 蔡順については、後漢書で短く注記し、周磐の伝記も付録として付けている。
- (38) **Giles** の前掲書中の#1937では、隣人が打ちのめされることによって、丁蘭には感傷的な記述がされている。丁蘭は晉代の逸士傳から採集され、大漢和辞典収録（Ⅰ, p.78, #2/201）のものでは、殺害されている。丁の孝子としての行為は広く喝采をもって迎えられたことから、その肖像画は皇帝の雲の塔に置かれてきたと言われている。武氏一族の場面の翻案については、シャヴァンヌの“*Mission*”、Ⅰの図116、128、1271、p.143；巫鴻の185頁、図130を参照のこと。
- (39) 舜の連作は、文物1972年3月号、図版12（カラー版）の司馬の屏風や、より早い時期のネルソンの石でソーパーがいう“生活動作”の図7や更に長廣の図版37、図51から再現されている。
- (40) より早期のネルソンの郭巨の説話は、ソーパーの図7、長廣の図版37、**Juliano**の鄧県のタイルの翻案では図71に見られる。
- (41) より早期のネルソンの蔡順の説話は、ソーパーの図6で再現されている。長廣の図54は、蔡と石室内部の棺とを全体像ではないが示している。
- (42) **Teng**と**Biggerstaff** による書誌学注釈の109頁参照。太平御覧の巻511、923で再び形を変えて語られている。オリエンテーションの図12は、尹、彼の馬、尹の肩をしっかりと掴んだ鳥と判断される残存片を提示している。
- (43) “二個の桃”の話は、晏子春秋から採録された。この話は、高貴な大臣で、春秋時代に齊の君主の顧問であった宰相の晏子（晏嬰）の出世の歴史を語ろうと意図したものである；大漢和辞典Ⅴ, P.869, #13914/28を参照。メロドラマの事件は孝子伝には例がない。もし、固原墓が実際に李順の再埋葬墓であるならば、この話は恐らくその息子が選んだものであろう。何故なら息子たちには父李順の北魏の皇帝への滅私奉仕振りが宰相晏子の奉仕とうまい具合に合致すると信じたからであった。初期の墓室画については、**J.Chaves**の“洛陽の漢彩色墓”、*Artibus Asiae* XXX (30)、1968年1月号8-12頁と図3-5を参照。オリエンテーションの図21は、“開疆（三士の一人）が喉首を切っているところ”といった非常に陰気なイラストである。



【付記】

この翻訳を命じてくださった、修士論文の指導教官・黒田彰教授には、主論文に必須とする欧米の「孝子伝（図）」の研究者が抱く「孝」の概念への私の理解を助けるための課題としたいという指導者としての視点と配慮があったにちがいない。警咳に接して以来今に至る師恩に感佩する次第である。

更に、この翻訳を和訳するに当って、私が疑問を覚えた箇所について、黒田彰教授の年来の親しい友人、米国ザ・シタデル大学（ノース・カロライナ）のキース・ナップ博士に懇切なご教示を賜ったことは望外の喜びであった。以上、優れた先達の方々の存在がなければこの稿は成らなかった。いずれの先人たちにも改めて深く感謝を申し上げる次第である。

（たにがわ ひろみ 通信教育部文学研究科国文学専攻修士課程）

（指導：黒田 彰 教授）

2005年10月19日受理